高山の文化を高めた人々〈4〉

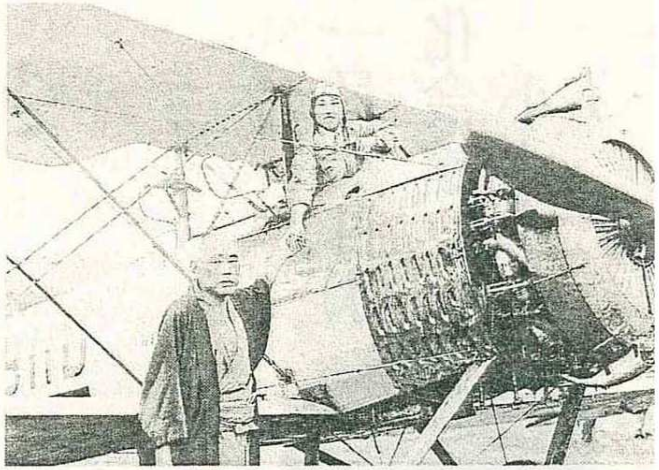
飛驒唯一の女流飛行士

中村征子

上仲鈴子は私の実の叔母で私の日本舞踊と長唄の師匠でもありました。又、一昨年九十八歳で他界した西川扇歳（中村ふく）を義母とする戸籍上の姉妹でもあります。来年は西川歳造・柏伊千蔵の二十三回忌の追善の舞踊会を文化会館において開催の準備を進めている今、奇しくもこの原稿の依頼を受け、亡き師匠に想いを馳せています。

彼女は高山高等女学校終了後、昭和五年十八歳で千葉県の軽飛行機クラブに入部、同七年初志達成、同八年日本女性としては初の快挙と云う東京ー大阪間無着陸飛行を達成、同十年東京を飛び立ち各務原を経由、高山市の上野平に着陸、九月九日初秋の晴れわたった空を一万人の人々の歓呼の声援の中、何回か旋回飛行をし故郷に錦を飾りました。

この女性飛行士時代のことは一昨年、平木国夫さんによる「飛行家をめざした女性たち」（新人物往来社刊）の中でくわしく紹介されています。その後、女性には一等飛行士の免状が交付されないなどいくつかの理由により、飛行家としての人生に終止符を打ちました。昭和十一年縁あって船橋在住の踊りの師匠、西川扇歳の養女となりその薦めもあって小さい頃から学び、好きでもあった三味線のプロの弾き手となる決意をし、命がけの修行をつみ、菊音会（菊五郎劇団の邦楽部）の試験に合格、菊音会の三味線弾きとなって歌舞伎座出演もしましたが、それも束の間、女性であるという理由により断念することになります。



それから六十年たった今、漸く女性パイロットの誕生を見ましたが歌舞伎座の世界は今も女性の例がありません。それ以後は扇歳と共に三味線と踊りを教え芸道二人三脚の生活を続け、終戦後は、船橋と高山を掛け持ちし、高山では末広会を主宰し高山市文化協会設立と共に喜多座での文化祭や、末広会の発表会開催と毎年活躍し、舞踊の発表会には、番組全部の地方（じかた）をお弟子さんに教えて弾かせ、自分でも弾いたり踊ったりしました。

私の十代の頃には、長唄の道成寺、連獅子、清元の吉野山、常磐津の年増などみんなお弟子さんが地方をつとめてくれました。楽しくお稽古をし、よい時代でした。「芸に打ち込んでいる時の緊張感は操縦桿を握っている時と同じ」と言い、夢を持ち続け昭和四十六年五月には東京虎の門ホールで創作舞踊「山・川・海」を発表。「山」には高山祭り「川」は木曽川のライン下り「海」は軽飛行機クラブでのった千葉県の海岸をそれぞれ舞台に見立て、高山祭りでは長倉三朗さん作の屋台を組み、曳き別れを演出、二枚扇での闘鶏楽の作曲と振付、高山の子供達による総社の獅子舞など、出来も好く長年の夢が叶ったと満足していました。

その二年後四十八年一月高血圧と心臓病のため六十一歳で急逝しました。その後私も亡き師の遺志を継ぎ、日本の伝統芸能を正しく継承して行きたいと願ってきました。幸いお弟子さんの一人には中学卒業後西川宗家の内弟子として入り、学業と芸の勉強に励んでいます。来年の歳造師追善の会には、亡き師の息のかかった名取さんも多数参加して下さいます。叔母も念願していた日本伝統芸能の発展のため精進して行きたいと思います。